



大内
十杉傳 第二輯

卷五

十
202
5

13
202
5



十杉傳 北五冊

大内 興隆 十杉傳卷之十

第十九回

閑知縣主水匠禍

北 202 5

説話 下下 十杉傳 二部ハ刀吾を二に於 居て眼を怒と声ありき。
 吾をれ刀吾よ血迷ひつる。今のでくの威勢にて誰より推ぎ推ぎ討ん
 と知縣主へ赴くる。口ましくあるも寄宿はまは善むの悪くもあは主
 水主の揮をうけて。あて侍の圖る煩あり。あつた自ら奮震して。
 一 大事を興ゆる思を仇りく報ゆるもあつた。勿論足下悪瓦をりて。
 る。うらみあはれど。あつたに侍の強率あり。憤多くといひけり。
 刀吾ハいさど怒り醒む。牙を嚙拳を握りて。某一個知縣へあは主水
 刃を辱めたる。近衛の梶木麻九郎を。一刀にきり伏て恨と復し

東



其もその坐をさぐり腹を切て便は眞之ゆくの義を以て捐れり命
 古沓斤足捐るより尚惜く争ふ様を以て鶴恩あり主水ぬいぢ
 ぬる福を乞ふ由と云ふに足下が詞は似と人を思ひぬる書物の入
 をのそとぞ遊卒と云ふ怪力乱神俱に語らずと哉と云ふ其武家の家
 小生直に言ふ所も老あり早も信と義と云ふ今君臣の因はせほど此
 然へ来てより幸久き主水ぬいぢ食を乞ふ賓客のて款待まで日鶴恩で
 辱めぬや。と云ふ鶴恩も功あり食を乞ふことと云ふ小況て言ふその
 効ありいそ酒食を食らへ居恥めらるるに臣死せしむと語ふ故に
 尚と云ふても強しと云ふゆゑ其処離されんと誓力を任して左衛二部が
 把る奉をさと拂へ主水の林を以て下りて飯澤よいといふは鶴恩が

ある其を。かすまてよあつ。その志多く小某死せしむと語を
 一。さき左衛二部がいす所さるに理るきよわは足下ふれし恥辱を
 わえし。麻九郎を飲て自殺るまはもつと云ふ身を捐て恨を雪
 切る所なるのと二圖よあはれと云ふれは口より禍の被らざるに
 いは難し。足下吾家来りて殺手人々足下を認むるや。忽地和備人
 かといひぬ。あれは知察某を糾さるやあるべしと根元をいふに
 して枝葉びりを論ざるあり。加之おの主水が比喩めて足下が身を假
 彼麻九郎を討つるや。人口に被んぬ最状うねと云ふあり。足下は心志
 の健直る某もしく感傲せり。是も詮方あるらんや心を静めて怒を
 去りよ思量計策を巡らして過わす天の命あり。一時の怒は棄て

一、ま六十八九ハ過りのり。某もまの恨骨髄ハ徹きこも。
 まと後まどま時並至らむ。あまらく桂木麻九郎が頭を撃ちこもえ
 のこと。理を尽くする主水が詞小刀吾も今まら詮方あり。拳成かちらび
 苦笑ひして。雲時ハ其処ハ對居る。あつるハ主水が客のうちハ伊丹
 左司馬水野雪六。その外餘々の弱官等。一閒隔てハ片濠あて。まら
 動静を詳ふま。あつるハ面をくせ居る。雪六左司馬ハ武道ハ
 まらく長る者どもあて。殊ハ血気の壯夫多ればハ刀吾が言葉を深し
 ぞ。主水と左傳二郎がハ所ハ迂遠ハあつると。喧らつ。まらんと奉
 へ握つ。對居るハその更果てハ刀吾ハ頓ハ理ハ伏。まら終らざるま
 且ハ左司馬ハ只管いせら。牙を嚙て雪六等。その外集會ハ人まら。

什麼か。心の心さぬ。いさるや。わらふと。主水ハ日頃より。物ど
 いさ堪え忍び何のハ。まは隱便を專ると。あハ性多。あハ這面ハ覺
 郎が言語ハ終まら。不礼過言を宥恕して。帰らせら。あつると。心中ハハ
 無念ハ方あるま。それを強ハあハのハ先祖の家ハ復つて。あハ篤
 実なる所より。あつると。これハ主水ハハ食を。教日の恩を彼ら
 の。あハ刀吾が詞小ある。所詮此処ハ彼の。このと論じるとも
 ぞ。果ト。知瞭許ハせ向く。彼麻九郎を恨こも。されどもこれハ吾
 吾が心よりして。あつると。所主水ハハ揮ハあハねハ。その罪大人ハあ
 へま。足下等ハハハハハハ。雪六ハハ。そのハハハハ。望ハ
 ころ。いさ。違ハハハ。まら。此ハ。哲ハ。あハ。あつて。日々。食應の酒

十本松巻十

三

食あじの飽あき満ま肉にく肥こて渾ま身みだら。知ち縣けんへゆゆ六む麻ま九く郎らうふ荷か膳ぜんする人ひとま
 ああんんまま六む逸いつ々々欲よく尽じんし。むむきき人ひとるる六む知ち縣けんが家や族ぞく盛さかふふここれれが
 勇ゆう氣きををあありりままいいごご頑がん々々とと。ちちああれればば左さ司し馬ま雪ゆき六むわわをを笑あはれれたたり
 ああぐぐ。靜しず不ふせせよよははのの。大だい人にんににああつつ六む抑おさ留りゆうせせるるままでで志こころざしをを喪なくるるんんとと
 密ひそかかののままままらら。夫それよりより同どう志しの人ひとをを等らををううちち語かたひひてて知ち縣けん并ならへへとと
 馳はつつききううららのの。知ち縣けん并ならへへとともも知ち縣けん并ならへへとと居ゐるる所ところはは伊い丹たん左さ司し馬ま門かど
 成なりるる下げ司しをを引ひくく人ひととと言いふふ。近きん習じゆ梶かぢ木き麻ま九く郎らうはは父ちちのの難むづかかしし恨にくみ
 復かへんんあありり来きりり。汝あん麻ま九く郎らうをを曳ひ出だしてして口くちをを封ふせせ六む許ゆるささせせり
 隠かくままととあありり血ちままりりのの。汝あんをを破やぶてて三さん段だんととせせんん頑がん麻ま九く郎らうををよよびび出だせせり
 へへととあありりいいひひてて眼まなこをを怒いかれれ。白しろ眼まなこつつめめれれ六む門かど成なりるる下げ司しののあありりも

よよをを慄おそ々々とと頻しきににふふのの牙あをを震ふるひひ。喃な々々許ゆるささせせりりあありり。麻ま九く郎らう刀や筋ぢんは
 要えいああららむむとと其そのるるをを通とるるべべしし。ささししここままくく下げ司しああららむむ彼かの人ひとのの居をるる所ところへへ往ゆ
 ところところへへいいひひぬぬむむ。たたののははをを通とるるのの。渠のれれをを来きよよとともも口くちををままくくがが。谷やはは
 ああららむむののああららむむ憤いらいりりののああららむむとと。ああららむむ。回へい合ごう。白しろ洲しゅうののああららむむゆゆんんととをを
 雪ゆき六む井いとと人ひと馳はりりてて這は奴なああららむむ。麻ま九く郎らうをを呼よびびとともも出だしてして六む本ほんトト。たた
 速すみにに乱らん入いりりてて渠のれれをを封ふせせししいいひひもも思おもひひとと玉たまるる。又またをを放はなちちてて門かど内うちへへあありり
 いいひひぬぬむむ。狼ろう藉じやくののをを直ちよく搦なめめよよとと異ま口くち同どう音おんのの喚こゑりりてて突つ棒ぼうままままとと
 僕ぼくああららむむののああららむむとといいひひてて驚おどろろかかるる。雪ゆき六むととままららむむてて呵かとと笑わらひひ汝あんホホトトまま
 前まへのの輩たい幾いく百ひゃく人ひと寄よりりてて此この雪ゆき六むのの對たい志しすすままききいいひひぬぬむむ並ならびびをを知しせせんんとと
 いいひひぬぬむむああららむむ其その真ま先まへのの進すすみみ。一いち西さい個ごのの胸むねささをを後あ夫らとと拵しらふふ切き先まへのの兵へい

左右へ派りて。ウツト仰向し倒れし。虚空を握む苦痛をうけて。残る
人々肝を冷し。言ふと罵る。近寄りし。ふるふを僕伴。雪六の墓
地。玄園へ踊登り。此を其怨。小並居る。武士等。周章慄き。必しに
後。長刀よと歩めり。もふ先。歩み。人小袴の裾を踏られて倒る
あれ。櫻のひり。長刀を打さんとて。吾あう。後。撞く。おつて。其
いと。見。雪六を。雪六。左司馬。浴う。や。衣。狼狽。する。武士。等。を。あ。ひ
飲。み。突。あ。り。て。瞬。間。五。六。人。も。あ。る。痛。症。を。負。い。た。ま。は。ば。其。身。を
彼。方。此。方。の。子。舎。と。詰。野。小。庭。と。る。武。士。雜。人。の。も。駭。き。て。誰。も。堪。え
げ。り。あり。是。に。よ。り。知。縣。る。藤。田。胡。平。ハ。近。習。を。集。會。さ。し。怪。し。ぬ
珍。吏。に。こ。そ。所。も。あ。ら。な。い。と。館。の。玄。園。を。狼。藉。する。され。ハ。何。等。の。白

徒。も。直。地。小。さ。く。鞠。問。一。重。き。刑。小。さ。ま。え。ば。以。後。の。教。言。角。じ
と。十。日。早。索。を。ま。く。小。准。備。を。い。つ。書。院。の。方。へ。あ。ん。と。ま。る。を。麻。呂。ハ
知。縣。が。袖。を。い。ぢ。めて。口。多。目。麻。呂。あ。る。う。の。い。を。其。首。を。差。さ。り。つ。ふ
狼。藉。する。の。五。六。人。も。屈。竟。の。壯。夫。も。て。殊。に。兵。法。の。小。徳。と。ま。く
そ。を。殺。さ。る。と。搦。め。んと。あ。る。が。却。て。仕。損。手。と。一。安。に。それ。が。る。所。を。以。て
口。を。口。は。く。が。傳。使。小。ま。さ。く。の。傳。使。小。ま。さ。く。の。り。ま。と。傳。使。小。ま。さ。く。の。り
く。の。遠。卷。と。射。あ。る。車。小。臨。ま。て。心。を。静。め。謀。を。り。て。み。ま。さ。と。と
只。管。小。諫。め。り。あ。て。動。靜。を。伺。あ。り。と。も。詰。番。る。武。士。等。ハ。大。が。こ。ふ
逃。ま。り。て。残。る。者。ハ。僅。か。う。こ。も。ま。を。破。り。足。を。壞。ら。し。頭。を。向。し
裁。別。れ。く。筆。公。世。中。を。ど。く。小。伏。し。り。狼。藉。する。壯。夫。等。ハ。此。家。を。枕

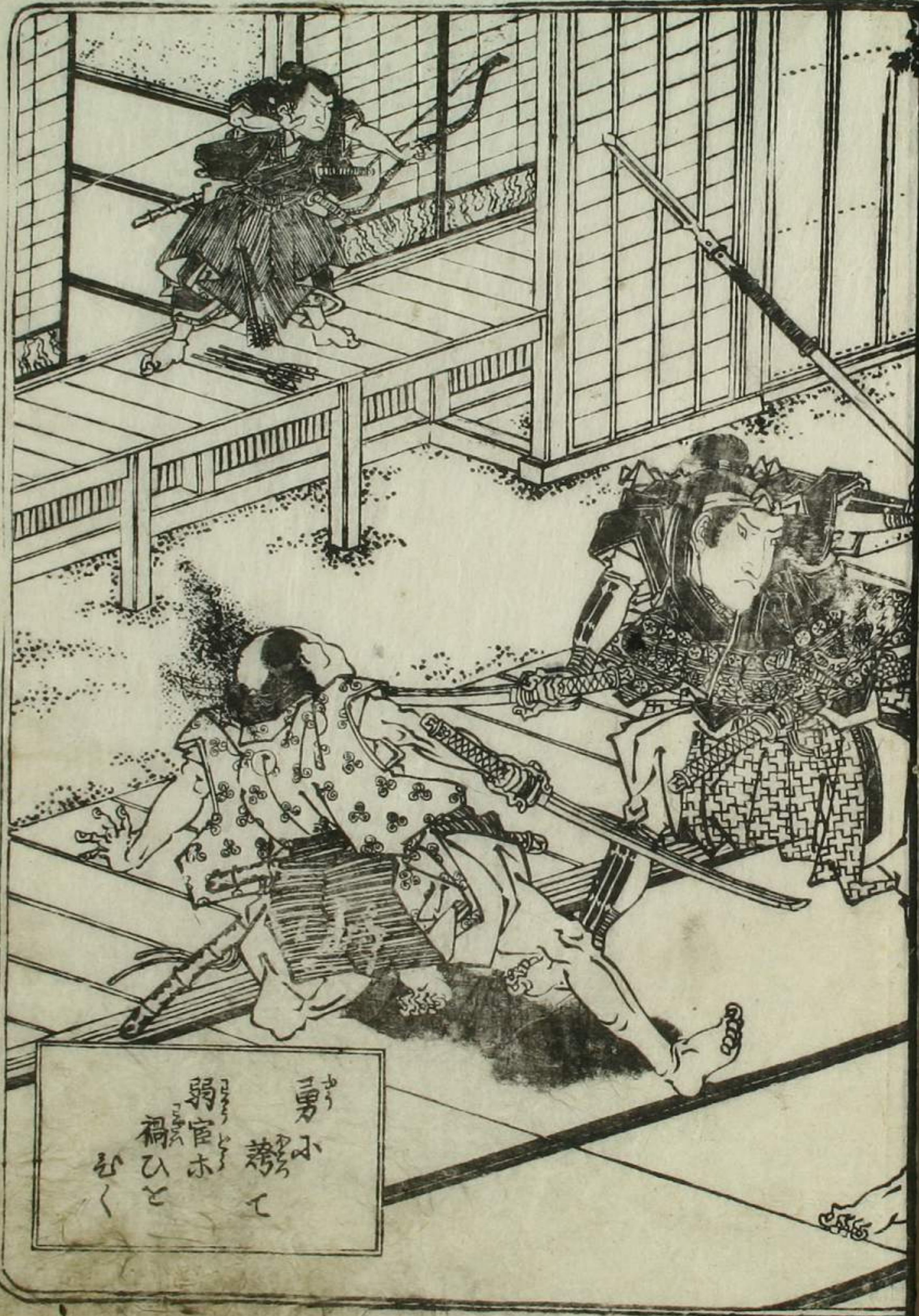
日本多事

木麻九郎と唱へ、近習とくせよ。その麻九郎を破れ。其の罪と造りし。あはれも隠ひて。おれは知縣を始とて。世家の入敷を破れ。中へ麻九郎いであくと。大音あびて。喚られ。麻九郎は。律いひを見。あはれ。弁まね。ねど。勿心。地胸中。満腹。して。いふ。その度を。變るもの。や。知縣が。傍へ。近來の。其。透。子。を。侍。り。し。小。這。奴。等。多。く。強の者あり。悔りて。六。過。あ。ん。射。り。小。命。と。て。速。よ。射。し。る。外。あ。へ。ん。と。大。息。助。て。牙。を。露。り。慄。々。ゆ。た。り。し。ま。胡。平。こ。し。の。恐。怖。と。心。中。何と。ま。こ。く。方。あ。く。よ。ね。小。計。目。と。中。い。し。り。麻。九。郎。来。り。半。弓。子。知。り。近習。も。よ。あ。え。り。其。身。も。弓。矢。計。目。に。ま。び。り。ま。し。り。ん。と。ま。る。忍。ぶ。左。司。馬。等。の。阿。修。羅。王。の。落。る。と。ま。成。勢。し。て。襖。を。蹴。ひ。て。喚。り。と。え。す。ん。く。私

妨ふ。及ぶ。既。小。知。縣。の。居。所。近。く。進。み。し。る。ま。景。勢。多。く。此。方。の。丘。落。り。弓。矢。計。目。を。あ。て。む。と。射。り。し。る。自。信。考。試。の。武。士。の。身。並。を。病。侍。の。飛。物。を。の。て。口。首。く。を。害。え。し。と。ま。る。自。徒。考。試。の。武。士。の。身。並。を。と。ま。り。と。射。り。し。る。征。夫。等。うち。そ。の。潜。り。ぬ。り。進。み。し。る。成。勢。多。く。當。り。と。ま。り。と。射。り。し。る。一。人。逃。入。逃。り。近。習。の。武。士。残。り。あ。る。ふ。多。の。り。ま。べ。か。り。の。渠。等。あ。及。び。と。ま。胡。平。も。後。逃。し。と。ま。の。道。路。を。害。む。の。其。餘。の。分。別。さ。し。な。し。麻。九。郎。も。と。ま。協。り。と。ま。の。あ。の。り。大。抱。き。て。逃。れ。と。ま。る。を。伊。丹。左。司。馬。等。あ。つ。て。丁。と。ま。る。必。然。し。り。と。ま。の。一。上。二。下。と。切。先。より。火。の。あ。り。ま。を。戦。り。と。ま。氷。柱。雪。三。の。餘。の。弱。兵。這。奴。麻。九。郎。討。漏。さ。り。と。ま。前。後。左。右。より。切。り。し。り。と。ま。麻。九。郎。も。ま。こ

さうのりる目六。左右あるふも負む。うろをまきえ前を留て戦
と五十余合。精神を震ひ気力を励まし。飛鳥のてこふ挑めず。
雪六左司馬も案ふ相違。悔まがらめひくふも練をむかひは
りて元よりさうて恨るれ。君胡平等が逃るを六眼にもあひざりたる
少を虎口を遁まそ。君胡平主従十人討て角の亭へ逃さる。俾わ
ると六相をあげて頼ふ人救を招くべき。烽火臺をさかひる。いま
る替草のさ。と必ひやくまひ忽地は火穂焔々と早昇り。烟り
四方にひるぐれば兼て期。う近きこの庄官を始りて。病表
知際が幕下に属する旗こをさして。ま六俾こそ出まふ。とこ
と免足いづ。馬を鞍むき飛ぶてこふ。馳来ぬまひ其勢忽地

四千人ひじくまふ。小集會なる。君胡平これゆく心強く。あぐの
よま。あぐの。曩の所へお来るも。雪六も必ひ討とえんと。見
ま六渠がひらく失て。麻九郎の寸々に足頭を縛り。赤く漆
て死馬を。ま六渠あ何方へゆかんと跡をひひもとまめく
る。と。此方の落より怨を。這かする雅人が。渠あは杉山主水
許る。寄宿るせる浪人あり。彼処へ逐近ゆたる。仔細を捕へ
べ。といふを。さ。君胡平も必ひ必定と。あひわれば何さる。な
疑ひわ。と。隊伍をそめる彼処へおよせ。主水を始め。頼とんと。
手配を。と。是より。喬杉山主水の刀吾が怒を看る。と。
俾穂使を討らむ。中無更るるを。知際許は相とて。



勇ゆう 小こ 勝かつ 弱じやく 官くわん 亦おほ 福ふく 比ひ 心こころ



十本木卷十

人殺を聚むる狼烟の景勢をこそ切らさう。いと火急多うそこをあらは
をせ着んやと牙がまゝ入る所へ面の色を變て櫻川の史記在傳三郎が
大息あはれまうはなう。俸一大車に及びぬ。天の命ある。ちや道々
所まゝ。心覺悟あれとゆゑも主木、一回点びて知縣許して俸火急
の相國、則て方より。仕わさう禍多うや。今暮も日をきて地獄と
あひま。左司馬雪六もお恨まえと。子舎をたれ六。渠が一個も彼れふ
居らむ。幾も人これをもて。暴小渠のへらほね。ま出あてと中
う。さすれば渠が知縣許を乱妨多う。のちわん。さらば吾罪
中へく道々。皆く私の遺恨をおまゝ。論さうと公より。命ぜ
らまう。知縣の對。狼藉多う。悪逆の死をのこ。罪を贖まへ。

嗟う。命運あつて。跡は足下に恃むる。とむら。佩刀を引ぬ。く
自害多う。まき景勢に。嗟やといひて。お。其。凶。刻。さ。う。復。あ。う。殘。忍。無
頼の知縣が。奸悪。彼。雪。六。も。多。う。を。假。て。天。より。野。甘。ま。う。多。う。多。う。其。罪
と自ら稱して。可惜。お。牙。を。失。ひ。あ。り。ん。聊。早。ま。り。あ。う。似。う。某。愚。意
を。巡。さ。小。律。の。あ。ふ。及。ま。六。ひ。ま。ま。う。此。地。を。立。退。て。去。じ。て。俸。を。圖。り
を。り。り。あ。る。時。生。害。る。も。全。く。り。り。て。遅。う。じ。た。速。ま。ま。也。
さ。い。何。地。へ。月。を。潛。し。も。要。金。小。律。欠。て。六。万。更。ふ。心。苦。け。色。バ。
貯。へ。の。黄。金。白。狼。高。崎。より。船。小。積。あ。う。て。武。藏。の。方。へ。落。る。ん。知
際。より。て。村。の。向。う。を。た。え。心。に。任。せ。う。些。元。早。く。准。備。し。又。い。ご
と。と。諫。め。う。刀。吾。を。招。け。宝。藏。より。金。銀。財。宝。を。り。出。さ。せ。心。を

人夫ひとぶは齋いけ一ひと脊戸せきとの方かたより高崎たかざきある川端かわがはへ持もつて船ふねを雇かひ
 こまを載のせたり。さるむじよ知縣ちけんの人救隊ひとすけたい伍ごを乱みださず馬蹄ばていの中なかに
 天あまの音ねより地ちを震ふるり。鬼おにの声こゑより押おしよる。主水ぬすみづが莊ぢやう八平はちへい生なまふか
 けり。橋はしをもひびきしりち披ひらき。人ひと一個ひとごもをさふれば叔おじとを渠みちホが
 謀まうあり漫まんふまひつそとひて普あまく其その処ところに扣ひけり。

第二十回 碓氷川うすひまがわ西船にしふね屢しばしば戦たたかふ

此間このひま小左衛門こざゑもんハ資財しゆさい武器ぶきををさへく。人夫ひとぶは齋いけ一ひと準備じゆんぷしとく。
 舟ふねを物見ものみの小窓こまどより知縣ちけんが容よう子すけを伺うかがへば。門前かどまへ小馬こまをたぐ
 り。門かどのまを伺うかがへ居ゐる。属徒しゆとは猛まう卒そつ力士りき。小具足こぐそく小舟こふねを固こ
 めて。劔戟けんげき尾花おひなのどく。小連こつらね無な二無に。示し込こめんと。いふもあれば否いな

させを渠みちにさる謀まうあり。門戸かどを固こめて静しずまり又またる。いひしよて討う
 んが。あの。卒そつ尔にに。いりる。過あまり。と衆しゆ後ご紛ま々まとて一定いせむ。
 雲くも時々ときとき刻ときを移うつさる。と小左衛門こざゑもんハ馳かりて。主水ぬすみづ小舟こふねハ表あは
 云いふ。それ。その。間まふ。い。ご。お。ち。多おほく。高崎たかざき。ハ。資財しゆさいを。川かわ船ふねに。積つむ。い。れ。む。
 大人おとなが。在ある。ま。を。待まち。と。居ゐ。る。と。い。ふ。と。捉とらま。す。と。い。ふ。と。主水ぬすみづハ。頭あたまを。左ひだり右みぎも。ち
 ず。実じつふ。つ。ま。知縣ちけんへ。對たい。して。い。さ。る。野の心こころを。救すくま。ね。所ところ。ハ。雪ゆき六む等とう。が。脚あし
 より。い。て。斯かの。ど。く。珠たま事ことに。及およぶ。あ。れ。ば。某たれ。も。も。連つら。ま。さ。る。公こうへ。對たい。す。
 る。い。ま。ま。を。僅わずか。小こ道みちを。守まもり。今いま。ち。ち。ま。ち。に。逆さか賊ぞくの。汚けが名なを。被か。り。
 偏ひとへ。ふ。これ。天あまの。為ため。に。災わざはひ。と。ら。い。歎なげ。く。ふ。も。尚なほ。余あま。り。あ。り。主水ぬすみづハ。も。腹はら。を。見み
 たり。と。い。ふ。と。覚さ悟ご。は。ま。れ。と。汝なんぢ。が。諫いさな。を。も。ま。さ。二に理り。あ。る。ふ。わ。ら。ぶ。と。又また。ハ。普あま。く

其意小老をひ遠く走りて去らんと欲せしむ。此まゝおを立退きたらば、その
 ろく後まゝ小似たり。その此死を立退きた時節を候てゐる程なり。
 聊勇威を渠等小老のて徐々たるをさるる度原のきこふ小わらふも然
 る。其小老止まりお従ふ家親郎等その外の人衆を俣して二回渠
 等おひ退ひ。あはて跡より逐着へば、你は速く高崎あり。飛場に至
 りて吾を待ね刀吾の気早き雄子あれば渠二個にて滑くまらる。六
 吾々が月をも案下。且安閑と居る小老と雜入者の荷物を托けて
 馳来らんと疑ひなり。まねのまじく期を喪ふらるる量ゆをいと
 いひ、まの月を固め士卒に命じて馬を牽よむ。いと此小駒まじ
 かりく馳いんとする方を記しあり。たゞ勇氣の存とて従ふのめをま

雜人物の要ふまゝのつ。其も俱々小這奴等が一回駒悩まさん。
 待多といふをさるる。吾等の上は、其遺ひま。頻々高崎に至れよ
 や。若強小輪をさるる。たゞ速く終文さるると中々怒りを會より
 て左傳二郎の事多く。まづ命に従つると脊と表別をさる。その小
 主の徐々と門内に馬をひて遙此方をこすと存び兼て認る。近
 きの庄官のまをひのりさるる。知照藤田が郎後等前後左右小従
 がひて威儀堂々と列を乱さず外堀の淵ふひとわらば、まの月を
 守り笑ひを會ひて、這奴等を劫りひきせんと猶夫とてらに
 はぐらむげりり小引候と兵弗とまらと放て、鳴りては、胡平が
 頭上をまらして飛さるる。まら並ぶる士卒等もこれ小駭きし。まら發

既に敵を被知りしむ。それ討ちあはし喚りて八方眼を巡り。
 足高きるじく狂ゆる。おどろきよひれと杉山まの法燈をあせらる。
 知藤を同くひて一声叫び微塵ふるまんと討てぬ。さうやといひて庄友
 らを等辟りて速をまわらざるを物守せ給右をさへ左をつた。
 疫の神の荒らるるふ。在ひまらりて薙らるれば馬の蹄あひれて。
 踏倒す。蹴飛さす。時のろい十四五人深淵を貫て倒す。六
 多胡平をなすてふ一個のまふふく。駒悩まされいよく心易く。
 士卒を励まし。武士等を責む。只管頼ひからせら。敵々名ふお入
 杉山まの日頃よりして面を認め取あ。戦ひ後ろに存をと声を
 限らる喚りて。お経いり。馬のま。それどもまあがる練の戦先

多くあつた。後巡をるふより。まのひらりと汗を
 馬小尚一鞭をくえつ。大喝一声叫ぶ。知藤藤田多胡平の衆
 多馬入む。と馳けま。多胡平も太刀ぬた放つ。真甲にき。騎
 おどろめる物をもし。杉山まの。後夫と血刀を左右ふら。あ
 多車ふまら。討てぬ。山を。多胡平通。野を。精神の
 ありひら。或、所ひり。要時なる。戦ひ。杉山が。威。敵
 正懐。心中億。一。剣法。四。途。路。小。多。く。り。安。中。の。佳
 人。虎。尾。綿。吾。と。多。胡。平。が。従。身。あり。遙。の。畹。り。馬。を。飛。一。墓。地。小
 馳。ま。つ。ま。あ。が。左。を。丁。と。破。さ。ま。ま。て。は。方。を。あ。り。め。り。嗟。然。と。や
 虎。尾。綿。吾。日。れ。少。の。不。足。の。兎。身。あ。れ。と。望。と。あ。る。首。う。ち。ひ。き。せん。

其如動くやと喚らるる刀を下とて折りて打ちて其胡平力と云く
 有無をもしむるもつらむるを引かざりて杉山が果すと馬より下下と
 足つらるる胡平八七九命のあつを破るびと嗟と叫びり馬より
 真逆さるる棒とありて所所の痛痕多るれば血は多るれて小草を赤
 しくし声を放つて叫びらるる。まゝして綿吾ハ満面小怒りをあて目
 より尚百倍の勇威を震らて上段下段荒乱入秘術を以て討く
 る。主あり難多く胡平を討ちありとて馬小放りて歩行をとりて
 虎尾をきく跡の方をたると小足もまを繞り一即ち士卒大々
 討めされとた。鯨波の声夫叫びの音のまゝ入らるる。今もこれ
 まゝあり。あゝよふの落神あゝのまゝよふの山所にて綿吾と差ちかひ

死るんや。左衛門部等はいらげらるる吾を傳らるる。是も便也。いざ甘
 一とせむるや。虎尾綿吾がすた回る。討かむる杉山も。まゝとて
 あひの後巡る。田の畊畑の縁を傳ひて稍々小退くる。まゝとて時
 刻もあつにまゝとて。日も西山小傾する。遠方小雷なる頃人見が原へ
 至りたり。此と死もあらず。虎尾綿吾も。まゝを暮らひつらむ。まゝとて此
 如小踏むまゝなり。霎時まゝとて。あひつら小嚮小まゝとて。左の疵いま
 る。公痛も甚だしく。堪えぬや。あひつら。後の樹林をまゝとて。踏
 裏じて二群の馬の音のまゝとて。樹まゝ。回小旗をまゝとて。雨のまゝ
 小乱箭を射わらむ。まゝとて。心の裡もまゝなり。吾小続ける。其
 る。定らぬ。知察が荷胆人あゝん。今ハ心神勞まゝとて。其腕の痛も



四方に
狼煙と
旗を
立てて
官軍
を
討つ
館
主
水
か
討
つ

十本杉巻十

四

三

強くて果敢とあつた働きにびびるふ前小虎尾神吾あつて。口を又防
 めてつらむ。中へ後より荒馬の入馬籠ひ来ふべしとく。道々路
 を要るに。忠てもめても運のまゝの程のび目て。虜とあるべ。吐の
 うの恥とあつた。た。速小生害せむと。小ざら。里(攀)のぢりふ。
 道まゝ。杉山。それ討つ。あつて。神吾が。もの者十人けり。栗の前後
 を。より巻て。突。そ。難。と。難。ふ。む。で。自害するべき。透。え。あ。ら。ば。
 痛。症。を。忍。び。て。と。直。を。ま。さ。ん。寄。来。る。者。を。両。段。と。ま。突。め。る。を
 かね。下。と。敵。五。人。を。破。て。お。ひ。ふ。樹。林。の。裡。より。弦。音。高。く。射
 中。ら。る。箭。の。雨。より。驚。く。と。ら。ま。あ。ぐ。太。股。へ。羽。づ。ら。甘。め。て。ま
 ければ。ま。あ。の。口。を。を。ら。む。ぐ。う。捨。て。跳。て。来。る。敵。を。防。ぐ。を。ふ。小。虎。尾

神吾。草。天。の。荒。ら。る。と。死。威。勢。中。太。刀。真。甲。小。虎。醫。へ。ま
 び。と。う。ち。と。を。男。ま。ひ。の。ま。あ。ハ。救。す。所。の。深。庭。小。弱。の。防。ぎ。と。ら。べ。う
 ら。久。さ。ら。る。ら。う。あ。ふ。ま。ま。在。傍。二。郎。ハ。止。上。を。び。び。ま。あ。ふ。ら。う。ま。て
 高。さ。ら。至。り。う。す。れ。ハ。刀。吾。ハ。川。船。へ。資。財。を。尋。く。積。り。て。艦。の。方
 へ。ま。あ。い。で。る。胃。の。も。と。り。た。る。を。醫。と。此。方。を。送。ら。ま。あ。居。り。
 び。で。在。傍。二。郎。ハ。彼。処。へ。い。り。云。云。の。よ。う。物。が。う。程。あ。く。大。人。在。ま
 へ。ま。あ。ま。ま。ま。あ。を。漕。お。ま。ま。ま。准。估。て。俟。め。と。水。ま。あ。ま。あ
 よ。う。差。去。り。と。待。て。も。く。ま。あ。ハ。来。ら。む。と。され。彼。者。を。駒。橋。と。ま。と
 邊。の。ま。あ。い。で。心。許。る。死。野。あ。ら。う。と。あ。を。捐。て。彼。処。へ。ま。あ。い。で。入
 の。来。あ。ひ。る。ハ。命。に。取。ら。る。罪。を。責。ら。ま。且。漕。お。ま。ま。使。て。あ。ら。う。

如何いかに不甘あきらまうとちち譚たふ小刀こ吾わハ腕うでを極たさす。吾速われは小こを
 向むかつて和わ縣けんの奴やつを盛もりて大人おとなを伴ともひ来こる斯ごとの如ごとく
 多おほくをどる。吾われ尙なほ小こ鬼おに石いしの如ごとく知ち縣けんを去さり麻あ九く郎らうを以もつ
 して志こころを立たえぬのを生なま中なかつ小こ足あし下したにそを速すみくれて本ほん意いを失しふ
 の事ことあはた大人おとなの生なま死しを測はかりぬ。安やす田たと案あん下したにひく俵わたして
 心こころ苦くるし。足あし下したハあはれすもあはれ某なつか一個いっ石いし原はらへ飯いへて
 るん。其その跡あとあてあひ所ところへ大人おとなの来き多おほく某なつか来きるを俵わたと小こ漕そう出で
 して利り根こん川がわと衆しゆ出でり某なつかあへ飯いへて来きて船ふね多おほく引ひ上あり。利り根
 中なかつおひつたやとといひ捨すて衝つとあひおとて左ひだり傳でん二に郎らうハ招まきとて
 是こゝより彼か奴やつへ至いたる。鬼おに小この障さやをとりて黄昏くれな昏くれといふ也なり。されば

万ま車ぐるま小こ便べんわく。且かつ之の所ところより立た退たいを和わ縣けん出でて多おほく入いり討うつて
 向むからる。さす其その一いっ個こ中なかつで防ぼぐふその術わざあはれはる。是こゝを
 其そのあはれを量はかり小こ便べんと誘まひく。来きるそのを今いまも小こ後ご悔くわいるせ
 どもその程ほどを。刀やいば吾われハこををせむあはれ。今いまもいひて甲か斐はい多おほくを
 咄はなつといふ。中なかつもや往いり小こあはれ。さかといひて葛くわ地ち小こ石いし原はらと
 して駈かけてゆ。案あんにさつと此こゝを小こまあ多おほく資し財ざいを船ふね小こ積つく。その野の
 より落おつてを何なに方かたより入い漏れせり。庄しやう官くわん岳たけ平へい先さきよりその人ひと救きう
 三さん十じゅう四し五ご人にん逆さか賊ぞくより杉すぎ山やままあが資し財ざいをばり。松まつのあり。それあよ
 と口くち々々小こ便べんのつとむれ来る。まのやと早はやく左ひだり傳でん二に郎らうを以もつて水みづ土つち
 等らうふも。まのそれく下した知ちを傳でん入いり汀ていをさりて舟ふねを歩あり。松まつ端はた小こ衛ゑと

おきり。岳平の下め被入々。山をまて押せ果る。一渡り船をこ死
 ね。左衛三郎が乗る船へ曳々声々押しつゝ、あまをとりぬ。船
 端へ踊りこぐ太刀技々々。きくと吹くる。これぞ寄らぬ勢あれば
 前後左右よりあまを巻。左衛三郎が乗る船のあまを大半討たれ
 け。かくて、防櫓をひくごし。あま小命とて艦をまむ。あまのふ
 川下へ漕ちりまに。岳平もろひ慕ひ来て。速りこむれば、今か行舟
 途方多く、進退此処に究まるをり。彼方ある芦の葉の中より
 漕ちり小船の中。乗る人五六人曳々声々とおよせ来る。物音
 とひ岳平もろる。乗る舟にとひ殺す。瞬間に七八人水中へ吹か
 しぬ。その人推とふがなれと、左衛三郎の圖らむも、佐とる人けり

と見と。心強くも威勢まきり。勇を奮つて戦ふ。岳平方ハ
 不意をうぐ。逃んとすれど船中あれば、進退せし自在ある。は
 或ハ船楳へ突倒さす。水中へ吹かす。たゞ只管不叫ぶ。多
 適水の心ある飛いで遊む。命けりを佐りつぐ。もろるもたふ
 庄官も。岳平も討たす。かれハ。難兵もろりちりく。跡形多くありに
 たり。左衛三郎の勢ひつ。船漕よせ。名をうたれ。伊丹左司馬水野
 雪六そのもの。忍ぶる者もあれば、念地小声をあげ。足下をも急と救
 ひ。あまの事多。律のあまよ。及べぬ。あま足下をも所為より
 ぬ。あまよ。あまの仕やて。る。乱雑もろる。あまもも遣恨
 る。あまよ。此方ハ船楳不顧着。言す。余々大入不難あれ



上巻



神箭と
幾て
處女
賢士と
まゝ

上巻

かゝる仕わざするものにあはば吾々大人が懣憤をたまえなれ
 ろしるまで直小石原へ帰らば大人が難むも多しと麻丸
 郎を討てより。妙美の方へ逃さるる。這般とていふまで。そ
 一大事と引かへて石原よゆれば誰人も在るゆゑ叔と計
 強めり。動静をまひばあしあり。船中におちあひさききき
 馳来り。其船中不恙多く。大人も在りしと陳謝しり。され
 在り。妙美を箇様と左衛門郎が。詞短く小告終り。まづ此舟よ
 ろち乗て且く緯の容を俟ねと頼て舟にぞ乗らる。かくま
 杉山まぢ八敵八方におり重なり。防ふとさるふ其術つた。道
 ぬその路る。兎も斯くも生害と心定めてより来る奴等を。

突除及除賊ふると。救箇所の傷痕多く痛めて心神昏迷し
 いた綿吾が焦燥てうちうた太刀を支えあつて後巡して後小
 古社の花表不跪き挫と倒る。はらりと綿吾ハ電光の早く
 又と勝りて。一おとまりはらる。まぢハこゝをさへ兼て既小危
 るてりあり。彼古社の裡より。弦音高く一筋の。松矢と来
 つて競ひかる。虎尾綿吾が胸板へ羽ぶらせめて衝きつ。候向
 射やう。さうの綿吾あへん。嗟といひて挫と倒る。こゝろ不
 測何者と。まぢハ頭をめぐりて社の方を信と。二八可の蟬
 蛸と。と花あだる一個の。處女弓矢。携へ宝殿の戸をおひて
 まいり。完ふと笑て衝き入り



江戸作者 心 為永春水稿

江戸画工 溪齋英泉筆

江戸浄書 松亭金水校

春 春色梅 ぶら ぶら 全本 為永春水作
六冊 歌川國貞画

天保二年 江戸文永堂大島屋傳右衛門

全志書林 大坂群玉堂河内屋茂兵衛

陽春發版

製本 最善

江戸文溪堂丁子屋平兵衛

